

治療の選択肢の自己決定に納得出来なかった患者に対して ナラティブを考慮した援助を試みた症例

永松浩、板家朗、田中宗、鬼塚千絵、木尾哲朗

九州歯科大学歯学部 総合診療学分野

抄録 病気の診断と治療には個々の患者の解釈モデルや背景を把握する事が重要であるとされている。今回対象となった患者は、悩みの原因となる歯を抜歯すれば問題が解決するという解釈モデルを持ちながらも積極的な治療に踏み切れず、現状維持を望んだが、その治療方針の選択に満足していなかった。前医から引き継いで担当した研修歯科医はこれまでの状況、現在抱えている問題、心配、希望に関して時間をかけて医療面接を行った。さらに、良好な関係を築き、患者のナラティブを考慮した援助を行う事ができたと思われる。

本症例を通し、研修歯科医は、患者-歯科医師関係を振り返り、患者を主体とした医療面接を体験することができた。

キーワード 解釈モデル、患者-歯科医師関係、ナラティブ、援助

緒言

医療機関を受診する患者は病苦からの解放を望んでいるため、その病苦に対する思いは多岐にわたる。それゆえ病気の診断と治療には個々の患者の解釈モデルや患者の背景を把握する事が重要であるとされている。これについて藤崎ら¹⁾は、医療面接は制度的会話であることから患者の背景に配慮した面接を提唱している。

一方、厚生労働省の平成23年度受療行動調査²⁾によると、外来患者で医師から「説明を受けた」と回答した患者は86.1%、また説明を受けたと回答した患者のうち、疑問や意見を医師に「十分に伝えられた」と回答した患者は68.7%であった。これは、説明を受けて質問や意見を十分に言えた患者は6割を下回ることを意味している。

今回、前担当者から引き継いだ研修歯科医が、6年間にわたって前歯の咬合接触が気になるものの、自身が決定した現状維持という治療方針に満足できなかった患者に対してナラティブを考慮した援助を試み、その行動変容の過程に若干の知見を認めたので報告する。

目的

担当となった研修歯科医は学生時代から「疾患を診るのではなく一人の人間である患者を診る」ということの重要性を学んできて、それは当然のことと理解していた。しかし研修歯科医になって

患者と出会い、患者の病苦に対して段階を踏んだ医療面接を繰り返すことで、これまで経験したことのない患者-歯科医師関係を体験することができた。

本研究の目的は、今回体験した患者-歯科医師関係の存在を検証し、患者のナラティブを考慮した患者に対するアプローチや行動変容の援助について振り返る事で、研修歯科医自身の気づきを引き出し、今後の臨床研修に役立てることにある。

方法

対象となった患者について

患者：63歳女性（引き継ぎ時の口腔内写真を図1に示す）。

主訴：上下の前歯があたって気になる。

現病歴：6年ほど前から前歯が当たって気になっている。しかし、積極的な治療に踏み切れなかったため、月に一度の歯周メンテナンス治療のみを行い、現在に至っている。

問題リスト：口腔内の問題点（**Medical Problem**）：全顎的な中等度の歯槽骨吸収（M1）、下顎右側中切歯の過剰な唇側傾斜（M2）、下顎右側中切歯による上顎右側中切歯の突き上げに伴う唇側傾斜（M3）。心理的な問題点（**Psychological Problem**）：積極的な治療に踏み切れない（P1）、4本の歯を抜く事に抵抗がある（P2）。

ナラティブを考慮した援助を行うために予測